（毎月一回十五日發行）　昭和十四年五月二十五日第三種郵便物認可

東亞醫學

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ七　東亞醫學協會　電話牛込二七七二番　振替東京一一九四三〇番

われわれ同志が相寄つて、階行學苑を結成してから、既に五ケ年の星霜が流れた。その間にわれわれは華々しい仕事をして來たとは、申さないが、堅實に一歩一歩と大地に足をふんばつて目的達成のために努力して來た。即ち別表に發表した如く、階行學苑の漢方講習會は拓大の漢方講座へと進展し、同窓生は五百を超へるに至つた。その後日支事變の勃發するや、講座の講師を中心に、東亞醫學協會を創立し、漢方醫學による日華滿三國の文化提携のために盡力して、今日に至つてゐる。而もわれわれは更に一歩前進せんとして、ここに學苑創立五週年紀念の講演會を開催する。演題及び講演者氏名次の如し。一般の聽講を歡迎する。

皇紀二千六百年　階行學苑五週年　紀念大講演會

—場所—　神田區淡路町二ノ八（萬世橋省線電車須田町市）　東京醫師會館

—日時—　昭和十五年五月廿五日（土）午後正二時開會（時間嚴守）

祭事

一、醫祖神祭
一、先哲醫家慰靈祭
　東亞醫學協會々旗披露推戴式

講演

一、開會之辭
一、五行論に對する一考察　矢數道明氏
一、經絡の發生に就て　西澤惠氏
一、蓁艽鼈甲散の運用に就て　龍野一雄氏
一、鍼灸治穴配合の構造　矢數道明氏
一、傷寒金匱の藥物の再吟味　柳谷素靈氏
一、瓜呂枳實湯の應用に就て　渡邊武氏
一、副食物と腹候との關係に就ての一考察　木村長久氏
一、人參の藥能と品種論　小出壽氏
一、和田東郭の研究　清水藤太郎氏
一、內經の研究態度に就て　大塚敬節氏
一、閉會之辭　矢數有道氏　大塚敬節氏
（午後六時終了の豫定）

【入場無料】　來聽歡迎！

主催　東亞醫學協會

第十六號要目

○崑崙穴位置とその運用　柳谷素靈
○腹水治驗　杏邨生
○私語放散　小出壽
○古矢知白と其治驗　坂下北門
○東亞醫學協會五週年紀念事務報告
○會報・雜記
○編輯後記

◆投稿規定◆

讀者各位の投稿を歡迎す。題目、內容は時事、學術、文藝其他隨意。長さは一〇〇〇字以下とす。

○國民體質向上の道　鮎川靜

國民體質向上の道

鮎川靜

安岡正篤といふ人は醫學の人だと聞く。その著、經世瑣言を讀んでみると、成程だとうなづける。――今に何とかなるだらうではない。及ばずながら、せめてこれだけでも、俺の力でやつてみせるといふ意氣込と努力とで世の中は轉開する。――といふ文句がある。

亦、――鬪爭は蠻人でも禽獸でもする。人間には血あり涙ある腹藝が大切である。日本精神の長養余は之を大臣と師父とに熟望する。それが結局日本を救ふ一番捷徑であるまいか。――と書いてある。

亦――今日上に立つ人々には概して、心中まさかまさかと思つて居る。そこへ下に使はれてゐる者が、事毎に手柄顔して、私が斯樣々々に取料つて置きましたから、御安心下さい。私が居りますから大丈夫ですよといふ風にとんだ楠正成ぶりを演ずるものであるから、どうも實相を直視して、覺悟を定めることが出來ない。

そも〳〵人間といふものが、そんなものだ。態々病氣になるまで、なーに大丈夫だと思つてゐる。萬一何事があつても、醫者も居れば藥もあると思つて居る。ところがその醫者や藥ほどあてにならぬものはない。そこでひよつと思ひがけなく病氣にでもなると、忽ち狼狽して醜態を演ずる。――といふ文句も出て來る。

斯うなつては政府から醫師免許證といふものをいたゞいて、おまけに醫者をして食つて居る我々は何とか考へてみなくてはいけまいと思ふ。他事ではない。醫者や藥ほどあてにならぬものはない、と

は相當なゞゴ文句ではあるまいか。修養とやらが積んだ御仁は、或は「構ふものか、言ひ度いやつに言はせて置けば好いではないか」と仰せられるかも知れない。ところが當の安岡氏を眞似るわけでないが、今に何とかなるだらうでは何うしてもいけまいと思ふ。まことや、及ばずながら、せめてこれだけでも、即ち、事、疾病に對する治療といふことなり、俺の力で、即ち漢方醫の力でやつてみせるといふ意氣込と努力とで世の中を――現代吾國の治療界を――轉開させてみたいものではある。

天下の漢方醫諸君、斯うしたことは私の言ひ過ぎてせうか。或は亦、時機、尙早でせうか。私にはそう思へない。一つ張り切つて象牙の塔を出て見やうではありませんか。後生大事と破れんばかり往診カバンから血壓計とやらを取り出して計つてみて、貴方の血壓は存外に低ひ、是だつたら決して決して腦溢血などに罹られる御心配は有りませんよ、と得々然と言ひ張つた唇の乾くか乾かないうちに豈計らんや腦溢血でゴロリと參つた、といふやうな事に習慣性になつて居るお醫者さんや、盲腸炎恐怖症で片ッ端から虫樣突起を切つてしまつて澤山の廢人を作つてテンとして恥ぢないやうなお醫者さん方はいざ知らず、苟くも漢方でも標傍して本當に病人を救はうとの心根の持ち合せある醫師だつたら此の際考へてみないではいけまいではあるまいか。

大塚氏は嘗て言つた。春の次には夏、夏の次には秋といふのが必

然の順序だ、同樣に漢方は今から愈々興つて來る、といふやうなことを。勿論、氏が言ふやうに漢方は興るに相違ないし、亦現に興りつゝあることも事實ではあるが、如何としても歩みが遲いやうに思はれる。モット、堂々と進むべきではないか。遠慮は要らない。漢洋醫學の折衷論なども出て居るが私に言はせて貰つたら問題にならない。湯本求眞先生も此のことに就いては――常識的に言つてみると、先づ「未だ時期に非ず」といふことになる。――と喝破して居られるが明言である。本當に西洋醫學を知り漢方を知つた人ならば斯うした意見が出なければならない筈である。亦、斯う言つて居られる。――漢方そのものさへ社會では一般に認識してゐないのであるから「漢方とは斯くの如き醫術である」と云ふことを正しく一般に理解させることが、まだ〳〵必要であらう。――とも言つて居られるが全く然りだと思ふ。一般の社會人はゲンノシャウコ、センブリを煎じて服むのが漢方だと思つて居る。漢方を現存やつて居る醫者の間にさへ治療は漢方だけれども診斷は西洋法だなどゝ言つて居る人もある位である。成程、お道具建てに於て西洋醫學の診斷學は一寸鮮やかなやうでもあるが深く考へると、なか〳〵簡單には言へない。此頃も私のためには恩師で有つて嘗て某醫科大學の學長をしてゐた方が「昔の偉い漢方醫者の指尖にはレントゲンや血壓計が着いてゐたらしい」と話されたと聞くが、その通りである。器械のレントゲンや血壓計には狂ひが來ないと限らないが手尖に着いてゐるのは確實である。私如き愚鈍な者でさへ漢方をやるやうになつてから本當の病氣の診方が聊さか解つたと思ふ。

又、湯本先生は――假りに漢洋を折衷するとしても、問題は內容

だ。――と言つて居られるが全く然りだ。血壓計で計つた血壓の低い人は決して腦溢血では死なゝないやうな時勢になつたら西洋醫學の診斷學も見上げたものだ。まださうした時代までには相當の期間が有りそうに思へる。煎藥の四、五日分で治る盲腸炎を是非とも腹壁切開しなくては治せないといふのでは本當の進歩した醫學とは言へない。生命を奪はないで腹が切れるといふことは治療學の本來から考へてみて正しい道ではない。ましてや、盲腸の手術をして以來めつきり弱くなりましたといふ人が今日の如くに多く、亦、蓄膿の手術は何度しても治らないといふことが今日の如く日常茶飯に言はれるやうでは一體、醫學、何するものぞである。是、亦湯本先生が言はれるやうに「抽象論でなく具體的に」病氣を治す實績から割り出して物を言ひ又、考へなくては駄目だ。全く「未だ時期に非ず」である。現代の漢方醫は折衷論などを云々するよりも先ず治績を擧げて社會に漢方を再認識させることが急務中の急務ではあるまいか。

と言つたとて何も私は種痘を止めよといふのではない。ヂフテリー血淸注射は必要なしと主張するのでもない。何も折衷の名に拘泥しなくても善い方法が有れば兼用して好いではないか。混用して好いではないか。

何う考へても現代の治療界の成績はあまりにお粗末である。日々相當多數の患者が私の方にも舞ひ込むがその殆んど總てが、博士、專門家、○○病院を經めぐつて來たので注射・手術、○綜療法と亂療の限りを盡して居る。勿論、治らないから來るのであるがそれらの多くは有難くも治つてくれる。手術をして惡いところは切つて除けて貰つたが主訴には變りが無いといふやうな治り具合ではなく綺麗に主要症狀もとれてゆく。斯うして患者は漢方を認識して呉れる。私は決して廣告をしない。廣告と喧傳は斯うして治してやつた患者がしてくれるから他に必要はない。

私は斯うした現實に接する故に斯うした悲慘な現代の治療界と漢方を折衷しやうなどゝいふ勇氣は起らない。亦、考へても見るがよろしい。「醫者と藥ほどあてにならないものはない」と馬鹿にしてかゝられて居るやうな醫學と妥協が出來やうか。

先づ漢方を認識せしめやうではないか。國民體質低下が問題になつて居る。レントゲンで透視して早期發見とやらに力瘤を入れるのでは徒らに神經過敏な人間を作るだけに終るばかりだ。せめてこれだけは、吾々漢方醫の力でやつてみせなくてはいけない。一世を風靡するの覺悟で國民體質向上を計らなくてはならない責任は吾々漢方醫の仕事であることを自覺し度いと思ふ。

崑崙穴位置とその運用

柳谷素靈

崑崙穴は私のよく使用する穴である。崑崙穴の部位は「外踝ノ後跟骨上ノ陷中」（十四經發揮）とあつたり、「足外踝ノ後五分、跟骨ノ上陷中」（三才圖會）と云ふたり、「外踝ノ後跟骨ノ上陷中動脈」（醫學入門）と云はれてゐる。淵々堂採穴法の採穴によれば「跛陽の直下、外踝の後跟の上へむけて推しさぐるときは跟骨に行き當る陷なる處骨のさわになる、踝の正中より少し下るなり）と云ふてゐる。現今の教科書には「アキレス腱と足の外踝との間の陷凹部」と云ふのが定說らしい。

ところが、崑崙穴の部位は實際患者に接した場合どう云ふ風なものを目標にすべきであるかと云ふと、（一）跟骨の上陷中、（二）足外踝の後五分、（三）動脈なる三點が目標である。ところが同じく陷中は陷中でも足外踝の後五分にあると云ふことは實際あてにならぬことがある。五分の點よりアキレス腱の方に近いこともあり、又足の外踝の後緣にピッタリと入り込んでゐることもある。從つて、その正穴を決めるには陷中も五分も崑崙穴決定の第一條件ではない。醫學入門の「動脈」なるものを先づ目標にとつてよい。「動脈」と云ふのは今云ふ血管と云ふことではないやうである。太い線狀の硬結物であると云ふ意であらう、との動なる字のついた釋はピクッとすることがあるからであらう。指觸上の感じは幾條かの緊線が知られる。

要はこの緊線上にして且つ、陷凹部に崑崙穴を求むるのである。

このやうにして求め得た崑崙穴であれば、頭痛、肩癖、背痛、腰痛、坐骨神經痛、脛骨神經痛、腓骨神經痛、大腿後側强直感、牽引等の異常感覺をのぞくことが出來るのである。又、感覺の銳敏なる人はよく上記の部に鍼又は灸の響が感ぜられるものである。又崑崙穴は脈の行るところ經火と爲すと云ふ釋で、所謂要穴であるとされてゐる。實際上に於ても又重要なる穴所である。

× × × × ×

腹水治驗

廣島　蘇堂　杏邨生

余の先考は明治十六年余が十歳時病を以て歿す遺命により醫を學べと常に亡母より訓誡せられ弱冠企望せる第一高等學校醫學部に入り校門を出で鞭韃を受くるも、其業成らず、殊に自昭和十年六月至同十四年七月相次ぎ子女を先ふこと五人晩節痛恨に堪へず、偶々一治驗を抄撮し、亡父母の靈に供へ聊か遺命に酬んとす。

廣島市〇〇町　會社員家族女三十六歳。

父母同胞各健存曾患なし二十五歳一子を擧ぐ、昭十三、十一、全身倦怠眼瞼浮腫に始まり某醫の診療を受く或時過度の洗濯を爲し、病勢增進遂に入院治療を勸告せらるゝに至り、急性腎臓炎の診斷の下に入院す。入院後惡心嘔吐を來し、服藥及食餌不能となる。或時某氏の言により民間藥を與ふるに鎭嘔せり依りて密に該包裝を用ひ病院の藥と入換へ與ふるなど種々手を盡すも病狀輕快せず、患者も正月を目睫にし、在院を嫌ひて退院す。歸宅後益々病篤く、殆んど策なし。然るに某博士は揭示の診療科目中に腎臓炎の名記あるにより、治療も專門的ならん。殊に主人も從前診療を受たることありて名聞高し依て正月三日入院、四月退院迄加療するも病況一進一退なり。其間患者幼時の常聘醫を大阪より迎へ院長と對診す。其結果によれば、之迄諸種の藥劑を供給するに何れも副作用のため、用量三分の一にも達し得ず、故に藥劑已ならず無鹽食療法も併用中なりと言ふ。然れども尿量增加せず、全身浮腫のみ增加し食慾缺乏終に又退院の止むなきに至れり。當時運搬夫曰く體重目測二十六貫を下るまじ（平素十二三貫）と退院後某博士より注射並穿腹術を受くること四月より十二月迄に計十三回、每回洗面器四五杯、大抵二十日間隔に穿刺す。九月に至り皮膚病併發し皮膚科清博士の診療を受くるに至り、院長曰く注射已によらず服藥療法の優れるを諭さるゝにより診を乞ふと言ふ。

初診昭十四年十一月三十日患者體格營養不良床上に起座し、眼瞼浮腫あり視力障碍なし、全身浮腫及皮疹に覆はれ、上下肢繃帶を施し其上を按撫し搔痒を紛らすものゝ如し、體溫普通沈脈胸部所見なし、腹部は臨月位食思便通不正經血一月以來閉止。

療法　煎藥を嫌ひ七日後再診するに著變なし、服藥以來口內糜爛一層藥餌を嫌ふにより八味腎氣丸に轉じ、其後分消湯にて頓に尿量增加し腹圍九〇糎より七三糎に縮小皮膚病も治し、一般營養良好となり、三、二四日より通院月經も十五ヶ月振りに來潮し、患者と共に驚喜せり。（一五、五、一一）

日滿醫學の交驩

先般滿洲國新京民生部保健司疫課長に就任された張繼有先生は、滿洲國に於ける漢方醫學を如何にして保存し、如何にして之を近代化して發展せしむべきか、又現在同國漢醫の再教育問題を如何解決すべきか等につき、日本に於ける漢方醫學の現況視察の爲め、三月下旬來朝され、拓殖大學漢方醫學講座の內容を調査し、東亞醫學協會を訪問されたので、種々參考資料を贈呈した。張先生は古くから の漢方と漢藥の愛讀者で、漢方醫學に對しては深い理解と、鋭い洞察力をお持ちで、一時間近くお話したのであるが、全く百年の知己と語る思ひがあつた。

滿洲國漢醫の再教育問題や、向後の醫育機關、制定の方針等は眞劍に考慮されねばならぬところで、先生の如き指導者の下にあれば、同國の漢方醫學は必ずや學術共に、正しい發展をとげ得ることを信ずるものである。張先生が御歸國の後早速次の如き鄭重なる書狀と「漢藥丸散膏酒標準配本」の贈呈を受けた。茲に謹んで御禮の御挨拶を申上げ先生の御健闘を祈るものである。

拜啓春暖の候尊堂益々御淸穆の段奉賀候陳者小生錦地滯在中は御多忙中にも不拘一方ならぬ御厚情と御敎示を蒙り誠に有難く厚く御禮申上候御蔭を以て今回無事歸任致し候に付憚りながら御放念下され度候。

偖漢方醫學の研究に關しては今後日、滿、華三國の漢方醫が互に緊密なる提携により其の眞髓を十分に發揚し現代醫學の不備を補正し以て進步せる東洋獨特の醫學を建設せらるゝことは最も必要なる急務であると存候小生も又微力ながら先生方の驥尾に附し此の大業に參加致し度く存じ居り候に付何卒宜しく御指導の程御願申上候數日前漢藥丸散膏酒標準配本一册別途御送呈致し候幸本書が多少なり共御參考の所あらば幸甚の至りと存奉候尙哈爾賓漢醫研究會月刊雜誌は今後直接御手元に御送致す事に依賴仕り置き候間御承了下され度候。

尙小生今回民生部保健司防疫課長を拜命仕り就任致し候に付今後共一層御指導御鞭韃の程御願申上候

敬具

張繼有

矢數道明先生

本會五週年紀念講演者の言葉

渡邊武氏

傷寒論、金匱要略が總ゆる疾病並に證候變化に對する治療原典である以上、之等の書に記載された藥物が、基原不詳であつたり、採取や輸入不能などの爲め處方出來なかつたり、或は藥物の誤用又は僞品を使用したりしてゐる間は眞の仲景の道は行はれぬ譯である。吾々は正しい漢方醫學を發達せしむるため、眞正なる藥物を常に備へて置くことに全力を擧げて努力せねばならない。斯くした見地より二三の知見を述べて見たいと思ふ。

柳谷素靈氏

鍼灸術運用に際して、如何にして治穴が配合されてゐるか、その內容を檢討し、その構造を究めて見ることゝしやう。

淸水藤太郎氏

從來の人參の藥能論を批評して、其品種の異同に迄及んで論じて見たいと思ふ。

木村長久氏

瓜呂枳實湯は概して咳嗽藥と考へられてゐるが、本方を運用するときの目標は何であらうか。之を咳嗽のみでなく狹心症類似症、又は溜飲症等にその目標に從て應用すれば顯著な效果がある。本方の應用目標を經驗の上から述べてみたいと思ふ。

矢數道明氏

肺結核や肋膜炎で微熱が續いて、小柴胡湯或は柴胡桂枝乾姜湯の證と認められるものが、投藥によつて却て病狀の惡化するものがある。その樣なときに試みる藥方が卽ちこの蠣元鼈甲散である。

その目標などについて述べて見たい。

西澤生惠氏

五行の問題を、いろ〳〵と苦心して調べて見ましたが、その調べたところをお話して御批判を願ひたいと思ひます。

大塚敬節氏

富永仲基の哲學を醫學の上に於て實踐化した人は和田東郭である。而して仲基哲學が日本哲學への道を示してくれた樣に、和田東郭は日本醫學への恩人であり、われわれは東郭の醫學に加上することによつて、日本醫學の建設が可能であることを信ずるものである。

龍野一雄氏

鍼灸の印度發生說と支那發生說、印度醫學に於ける鍼灸に關する知見等。

矢數有道氏

陰陽五行が妄說であると曲解されてゐるのは、要するところ之等が昔のまゝの形態で吾等の眼前に曝らされてゐるからである。これに現代的解釋を加へ、科學的衣裳を著せれば、立派に現代化する內容價値を有してゐると思はれる。斯かる觀點に立つて陰陽五行の再吟味をし、これが規定を設け、定義を決定することが內經學研究の根本義であると信ずる。私見ではあるが少しく新しい形式に於ける陰陽五行觀を發表してみたいと思ふ。

小出壽氏

私は腹を診察する時には五の點を選んで其部に硬結樣の抵抗を感じ、又は被檢者が疼痛を訴へる事によつて其人の平生の食物の內何がわざはひしてゐるかを判別する方法を花田順庵と云ふ醫師の傳として敎へられた。

此の五つの點に各の變化として疼痛なり硬結樣のものを現はす、食品を擧げて見ると動物性食品としては牛肉、バター、鷄肉、豚肉凡ての卵及魚介類植物性食品としては雜穀、果物、茸類、筍、酒、あんこ等である。

此等の點を平生に於て變化のない樣に食品を選ぶ事によつて病者は所謂食餌療法となり、健康者は病を豫防する一つの手段ともなるのである。

會員諸氏の御寄稿を希望す。

編輯部

拓殖大學漢方醫學講座及東亞醫學協會創立五週年經過

事務所　東京市牛込區新小川町二ノ七

第一回講習會

經過

昭和十一年

一月十八日

講師一同、淺草言問橋々畔常泉寺内、張仲景碑前に參詣し、偕行學苑創立を報告し記念撮影をなす。

一月二十九日

講師代表、頭山滿翁邸に參上し、本學苑のため翁より特に醫祖神『大巳貴命少名彦命』『國威』『國醫』の揮毫を受く。

一月三十日

講師代表、谷中墓地に到り淺田宗伯翁及び溫知社幹部の碑前に參拜し、本學苑の結成並に講習會の開催を報告す。

二月一日

拓殖大學二〇三號教室に於て講習會發會式を行ふ。頭山滿翁揮毫の醫祖神を掲げ、秋葉神社々司により莊嚴なる醫祖神祭をなす。拓殖大學々長の祝辭、頭山翁代理の祝辭演說あり。入會者總數七十一名

二月二日

ジャパンタイムス紙、張仲景碑前に於て撮影せる寫眞並に拓殖大學講堂を掲げて、本學苑の成立を全世界に報導す

四月十八日

拓大階上大應接室にて會員の懇親會。

五月二十一日

講師會員一同、津村藥草園を見學す。

七月七日

講師代表は陸軍省及び内務省を訪問し、『衛生省設置に際し、和漢醫學採用に關する請願書』を提出し、具さに陳情する所ありたり。

七月十五日

佛人ジャン・モット氏（醫學及理學博士）、本講習會に入會す。

七月二十六日

講師會員一同、頭山滿翁邸に參上、翁を中心に記念撮影をなす。

七月二十九日

第一回漢方醫學講習會終了式、永田學長祝辭、頭山翁代理祝辭あり、終了者終了證書を授與す。

第一回終了者は、偕行學苑同窓會を結成し、會則を定め、月次研究會を開催して益々學術の琢磨に資し、漢方醫學の健全なる發達のため努力することゝなる。

第二回講習會

經過

昭和十一年八月十九日

△講師協議會を開き、教材を次の如く定む。

一、傷寒論講義　二十講　大塚　敬節

一、金匱要略講義　二十講　木村　長久

一、後世要方釋義　十講　矢數　道明

一、和漢藥物學講義　十四講　清水藤太郎

一、漢方醫學史講義　十講　石原　保秀

一、實驗十四經絡講義　十二講　柳谷　素靈

一、臨牀講義、見學等。

會期　自昭和十一年十月一日至昭和十一年十二月十九日　毎週水曜日土曜日　午後六時より九時半迄

會場　拓殖大學講堂

十月一日

第二回講習會開會式、永田學長代理祝辭、頭山滿翁代理祝辭、入會者六十七名。

十月七日

拓大主催、大臣大使招待會に招待を受け、講師代表參列（永田拓相、馬場藏相、小川商相、謝介石大使）。

十月十日

内務省衛生試驗所粕壁藥草園を見學す。

十一月一日

拓大階上應接室にて、會員懇親會開催。

十二月十五日

第二回會員は仁友會を結成し、例會を開くことゝなる。

十二月十九日

拓大講堂に於て第二回終了式。

拓殖大學漢方醫學講座經過

十二月二十八日

拓大當局の教授會、評議員會の決議を經て、昭和十二年四月より、拓殖大學漢方醫學講座となることゝ決定す。

昭和十二年一月二十五日

東京日々新聞紙は『漢方醫大の卵、支那と提携して東洋醫學宣揚、拓大に特別講座開講』の見出しにて大記事を掲載す。

二月三日

東京朝日新聞紙は『この四月から出來る漢方の醫科大學拓大が權威を揃へて』の見出にて大々記事を掲載す。

二月十一日

拓大漢方醫學講座新設及び偕行學苑成立一週年を記念し先哲醫家慰靈祭を拓大階上大應接室にて開催す。

報知新聞紙は『拓大に講座を置き、皇漢醫學の復興、偕行學苑の一週年祭』の見出しにて寫眞と共に大記事を掲載す。

尙ほこの慰靈祭及紀念日は、日本醫事新報社編、日本醫事年鑑、昭和十二年小史中に載錄されたり

四月二日

拓殖大學漢方醫學講座、開講式。

講師及教材次の如し。

一、傷寒論金匱要略講義　二十五講　大塚　敬節

一、漢方治療各論　二十五講　木村　長久

一、後世要方及び治療各論　十五講　矢數　道明

一、漢方醫學總論　十五講　矢數　有道

一、漢方藥物學講義　十五講　清水藤太郎

一、漢方醫學史講義　十講　石原　保秀

一、鍼灸醫學講義　十五講　柳谷　素靈

一、漢方藥能各論　五講　清水藤太郎

一、漢方古典解題　五講　石原　保秀

一、漢方外用藥講義　五講　矢數　道明

一、臨牀講義、特殊講演。

會期

自昭和十二年四月一日
至昭和十二年十月三十日
毎週月、水、金午後六時より九時三十分迄
場所　拓殖大學講堂
聽講者總數百二十八名に達す。

四月十八日
横濱南京街　大德堂漢藥店を見學す。

六月十一日
階上大應接室に於て懇親座談會を開催す。

十月三日
津村藥草園及松澤病院を見學す。

十月三十日
終了式擧行。
拓殖大學漢方醫學講座同窓會結成せらる。

拓殖大學講座 第二回經過

昭和十三年四月一日
第二回漢方醫學講座開講、聽講者八十一名。

七月二十九日
階上大應接室に於て懇親會を開催す。

九月二十五日
津村藥草園見學。

十月二十八日
第二回講座終了式。
懇親會及終了論文發表。

十一月二十五日
拓大漢方講座内に本部を置き、日華滿三國の漢方醫學による文化提携を企圖して、東亞醫學協會發會式擧行。『東京日日新聞』『中外商業新報』『都新聞』はそれぞれ三段記事を以て大々的に之を報導す。
尙ほ本協會の結成は日本醫事年鑑昭和十三年小史中に載錄さる。

十二月一日
滿洲醫大、ハルビン大學、京城醫大、その他各政府衞生廳宛協會趣意書及び拓大講座教材を贈呈す。

昭和十四年二月一日
東亞醫學協會機關誌、月刊東亞醫學を發刊す。

三月五日
東亞醫學編輯主任小柳賢一氏大陸醫療視察の目的を以て出發す。

三月十六日
協會理事及役員十數名厚生省に野間醫務課長を訪れ、懇談す。

拓大漢方講座 第三回過經

昭和十四年四月五日
開講式、聽講者總數百十三名。
一、傷寒金匱入門　大塚敬節
一、傷寒金匱要方解說　大塚敬節
一、漢方治療各論　木村長久
一、後世要方解說　矢數道明
一、漢方治療各論　矢數道明
一、漢方醫學總論　矢數道明
一、漢方藥理學講義　清水藤太郎
一、漢方醫史學講義　龍野一雄
一、鍼灸學講義　柳谷素靈

四月廿八日
東京優良品販賣會と提携して、東亞醫學協會研究所を設立し、理事協議研究による經驗方を製劑化す。

五月二日
協會派遣小柳賢一氏歸還す

七月七日
理事清水藤太郎氏上海自然科學研究所囑託として大陸醫療視察の途に上る。

九月十四日
理事清水藤太郎氏歸京す。

十月三十日
拓大講座終了式。

昭和十五年二月十日
蘇州國醫々院、醫務主任葉橘泉氏と文書、著述の交換をなす。

四月一日　第四回拓大漢方講座開講。

五月廿五日　皇紀二千六百年偕行學苑五週年祝賀會。

本年度漢方醫學講座講師及教材

一、傷寒論（金匱要略）入門　大塚敬節
傷寒論、金匱要略の沿革異本に就き示說し、讀法及び研究法を例を擧げて解說し入門者に必要なる諸項につき詳論す。

一、傷寒金匱要方釋義　大塚敬節
傷寒論、金匱要略中の重要なる藥方につき、經文を講義し、證の把握と運用論及運用例につき詳述し、用法、用量、類證鑑別加減法に及ぶ。

一、漢方治療各論　木村長久
內科學、外科學、の病名により、直ちに應用に便ならしむべく、古方後世方の實際運用を指示解說す。

一、後世要方釋義　矢數道明
後世方の代表的重要なる處方數十方につき、その運用に際しての詳細を論ず

一、漢方治療各論　矢數道明
產科、婦人科、小兒科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、の漢方治療について論ず

一、漢方藥學講義　清水藤太郎
實物を供覽し、漢方藥の起源、性狀、良否鑑別成分より調製法調劑術に及ぶ

一、漢方藥理學講義　清水藤太郎
漢方藥物學藥效論より用量用法並に方劑に及び實際應用上の注意を論ず。

一、漢方醫學總論　矢數有道
病因學、證候學、診斷學、治療學、等につき全般に亘り總論的に解說詳論す。

一、漢方醫史學講義　龍野一雄
支那及日本に於ける漢方醫學の變遷につき詳論す。

一、漢方古典解題　龍野一雄
支那及日本に於ける著名なる古典實物を供覽し、その大要の解題をなす。

一、鍼灸腧穴學講義　柳谷素靈
十四經學、奇經八脈、何是穴禁穴論の大要を論ず。

一、鍼灸治療學講義　柳谷素靈
鍼灸醫術の實際及其の術式、鍼灸運用原理、刺鍼施灸上の心得、術者の心得、患者の心得、施術上の體位、施術の注意等を詳論す。

一、臨牀講義、特殊講演、見學、懇談會等。

右教材により、漢方醫學總論、病理學、診斷學、處方學、證候學、治療學、藥物學、醫史學、鍼灸醫學、診療法等總べて之を網羅し直ちに實地に之を應用し得るものとす。

東亞醫學協會々旗寄贈の企て

同窓會の諸兄姉、其後御變りは御座いませんか御伺ひ申上ます。漢方醫學講座終了後は、會員が御互ひに心の底から談じ合ふ機會に恵まれず、折角の諸計畫も實現に至らず今日に及びました。然るに今年は拓大に漢方醫學講座が開設されてから滿五週年に當り、五月には其の祝賀會が開催される由であります。就きましては、諸計畫の一端である、東亞醫學協會々旗の寄贈を我々同窓會々員の手で實現致し度いと存じます。寄附金は取扱の便宜上一人一口五十錢とし、一人何口でも申し込み得ることに決定致し度いと存じます。御賛成の方は、御手數でも、「振替東京一一九四三〇番（東京市牛込區新小川町二ノ七東亞醫學協會」へ、振替にて御申込み下さい。

昭和十四年度拓大漢方醫學講座同窓會發起人一同

野田一亟
安達捨次郎
相川すゞ

既に寄附金の申込をなされた方々は次の如くであります。

一金五圓也　東京　安達捨次郎氏
一金參圓也　〃　相川すゞ氏
一金參圓也　〃　福本榮次郎氏
一金五拾錢也　大阪　冲野與三郎氏

東亞醫學協會々旗寄贈の企圖に就て

別記の如く偕行學苑創立五週年と皇紀二千六百年の記念祝賀の意味で漢方醫學の特別大講演會を開くことになりましたところ、昭和十四年度同窓會の有志が發起人となり協會の會旗を寄贈して下さることになりましたことは協會としてその意義のある企てに感謝して居ります。講演會當日迄に是非とも間に合ふ樣にと隨分發起人の方々が努力して下さつて漸く出來上る運びとなりました。旗は二尺五寸四方、オリーブ色で裏付、房は黃色であります。上段には立雲頭山翁が偕行學苑創立當時特に學苑の爲めにと題して揮毫して下さつた「國醫」の雄烈なる文字を染め拔き中央には神話に因んで蒲の穗にて圓形のマーク（金と銀の刺繍）を作り中には拓殖大學々監宮原民平先生に特に「拓大漢方醫學講座」の八字の御染筆を願ひ、尙ほ右側に「皇紀二千六百年記念」及び下段に「東亞醫學協會」の横文字を同じく宮原先生に揮毫して頂きました。短時日の間にこの樣に順調に運んだことは全く感謝に堪えないところであります。偕行學苑當時からの同窓會員の皆樣に何卒この企てに應じて下さる樣にお願ひ申上ます。

東亞醫學協會

一口五拾錢、一口以上、振替東京一一九四三〇番、東亞醫學協會宛、裏面へ「會旗寄附」と明記して下さい。受領書は東亞醫學誌上に發表します。

私語放散

小出壽

○

某醫學雜誌社說に「惟ふに今日漢方醫學にあつては赤痢チフスの豫防も外科手術もやれず、それは今日當面の問題には役立たない。從つて差當り現代醫學の普及發達を圖ると共に漢方醫の再教育の問題こそ支那の醫療界に於ける今日の緊要な課題であらう」と現時支那の醫療界の前途に斷案を下してゐる。

日本のやうな小さな國の七萬や八萬の醫者ならなんとかならう。然し此筆者が云ふ樣に百萬からある支那の漢方醫を日本に於ける漢方絕滅運動の樣にやれると思ふのはどうかと思はれる。

第一今日漢方が赤痢チフスの豫防がやられないと思つてゐる事がおかしい。

支那には養性の道があり日本には養生の道がある。注射や消毒が疾病豫防の根幹とでも思つてゐるのかしら、養生を除外しては豫防醫學は成立しない。

私はこう云ふ事を提唱する。少くとも現代醫學と漢方醫學とを是非論難する人は兩方の醫學を實際にやつて見てからにしてもらひたい、兩方の醫學を十年づゝもやつて見たら、何れが是で何れが非か腹の底から湧いて來る。

○

神社に參拜して賽錢を投じてあとで、あの神社で賽錢をとられたと云ふ人は尠ないだらう。近頃患者の口をついて出るのは「何處の醫者でいくら〳〵とられた」と云ふ言葉だ醫者としてこんな不愉快をきかされる樣に誰がした。言魂を尊ぶ日本國人にこの雜言をはかせるやうにした罪は吾々醫師の全體責任でなくてなんであらう。

○

現代醫學の粹を集めて金と力で萬全を期してゐる軍陣醫學でもマラリヤと結核にはもてあましの態であるとの事である。

食物が各國々で異なる樣に民族醫學と云ふものは國々によつて異なるものである。

同じ食物だから生命を保つには何でもよいと內地にゐる日本人に西洋食ばかり食べさせたり歐米の人々に日本食ばかり食はして見たらどんなものが出來るか、各國の料理は其國の傳統と氣候風土で出來上つたものである。

大きな醫學と云ふ眼で見れば疾病を治する學又豫防する學でもあらうが、民族醫學とは相當遙庭があるやうに思はれる。

「鄕に入つては鄕に從ふ」は醫學の上にも充分あてはまる。

○

醫政問題が喧しいタツタ七、八萬の醫者共だ、思ひ切つて醫療費は昔の藥禮制度に戻つたらどうだらう。

病院も個人の開業醫も藥禮制度になれば少くも醫者になつて金を溜めやうの贅澤をしやうの子孫に亘萬の富をつくらうのと云ふ野心家は漸退する事は明かである。

まして醫家を相手の商賣も貧乏醫者を相手としては駄目とあきらめてしまうだらう。結局殘るものは國を憂ひ民を育む者のみとなる事は明かだ醫道宣揚を叫ぶ一端でもある。

○

モヒ中毒患者は全國では數十萬を數へ朝鮮を入れたら何程の數に昇るだらう。

此モヒ中毒の大多數は醫者の責任である事は免れない。しかも經口的のモヒ中毒でなく全く注射によるものが多い事は論ずる餘地がない。諸々として疼痛を訴ふる患者に痲痺劑を注入する醫者は國賊で無期徽役に價する。

一旦モヒ中毒に陷れば治方としては强制入院もあらう。一旦は差ゆるが如く見ゆるも痲痺劑に陶醉する快感は再び中毒患者にしてしまう疼痛に痲痺劑を亂用する醫者は死刑を覺悟してやれ。

拓大漢方講座聽講生氏名（追加）

吳　再　恩氏（現住所神田）
大河內義之氏（〃　澁谷）
本野　義盛氏（〃　本鄕）
崎濱　秀明氏（〃　中野）
渡邊　岱山氏（〃　横濱）
友寄　英正氏（〃　淀橋）
篠崎　一彌氏（〃　神田）
白天　貴氏（〃　小石川）
深瀨　眞逹氏（〃　荒川）
佐々木正人氏（〃　芝）
金山　東漢氏（〃　小石川）
金山　良鎭氏（〃　小石川）

記念大講演會に御出席の方へ、藥草の種子を無料提供す各自蒔種の上御栽培を乞ふ

第十五號第七頁第二段、桔梗白散の一〇瓦は一・〇瓦の誤りにつき訂正。

古矢知白とその治驗（一）

坂下北門

古矢知白といふ名は、凡そ有名ではない。有名でないからこそ、ここに紹介の必要があるが、紹介せんとする筆者も、實は殆んど何等の智識を持ち合さないのである。

筆者が知白の名を知つたのは、五六年前白木屋の古書展で、知白の著述である病因問答なる書物を買つたことに始まる。此書は上中下の三卷からなり、百部絹版なる限定版である。卷端には男の古矢知往なる人が、弘化四年に執筆した序文が載つてゐるから、出版された年代は見當がつく。

此の病因問答は非常に異色のある書物で、二十六人の門人が夫々難症痼疾の治療法をたづねたのに對して、その病因と治方を示したものである。又附錄として難症痼疾の治驗を集錄してゐる。而かも使用してゐる處方は、傷寒論、金匱要略に出てゐるものばかりであつて、その運用法と運用の根據が奇想天外であつて、一讀しただけでは、了解に苦しむ程である。これは傷寒論の解釋に易を應用したためであつて、易の智識があれば、そんなに難解ではないと云ふことが、その後に到つて判明した。

左に短文よりなる二三章を引用してその內容の一斑を窺ふことにしよう。

一門人北越青木禎佐者予が席に出で、傷寒論を與り聽くこと久し。其居邑一患者有りて予を迎ふ。往々患者を診するに、近方に言ふ眞頭痛にして、朝に發して夕に死するの症也。惡心、煩悶、心神不定、頭面冷汗を流し脈微、手足逆冷、其苦腦反覆顚倒す。予青木に向ふて曰く、我が門に在りては何れの方を投ずるや。青木曰く、甘草乾姜湯ならん乎。其謂何ぞや、曰く、師の說に依て之を按ずれば、此症は陽氣滲漏の甚しき者にして、虛陽と雖ども今上に鬱滯するが故に、苦痛其頭を裂くが如く、殊に百會の穴は正陽の洩る所ならん乎と、其理を詳にす。曰く、我門の奧を得たり。予匕を執るに及ばず。此足者足下に詫すと云ふて辭舍す。其後三日にして頭痛悉く退き常に復す。

北越高田屬里一農夫、歲三十餘一日に水一斗を飲で、一斗を利す。腹部故無し。食亦其常を失はず。然りと雖も氣力は日を次で脫し、面色微黃を見す。前醫腎氣丸料、或は白虎湯の類を投じて、其驗無し。予按ずるに是中位不和の然らしむ所にして、水火交合せず、脾陰胃腸を請けず、故に水暫くも中位に止らずして、小便に下り、留らざるに依て渴する也。此れ前に云々する如く、六箇月大便不利の症に相反すると雖も、其因は同き者にて、中利を得る時は、大便生じ、中和を得る時は、小便に出るの水止りて渴止む。是亦小建中湯を投ずる事十五貼にして、其飲四升を減じ、五十餘貼にして全く癒ゆ。

加州金城下、一患者有り、歲三十餘、小便不利、凡三年、其飲常の如く、此人更に小便を欲するの氣無し。前醫數輩寸驗なく來りて予が診を請ふ。形體色脈五盲膜狀常に異る所なし。只脈弦なるのみ。此れ前に云々する水一斗を飲みて、一斗を利するに反して、其因同じ。中位の不和也。此れ胃火脾に及ぼさず、反つて脾水を乾涸なさしめて、液は一滴も無きほど乾燥す。故に水膀胱に下る可きなし。六箇月不大便者の穀を焦滅して、屎無き者と同じ。依つて是亦小建中湯を投ずること五十服に足らずして全く癒。

越中州四方宿網屋某者、膝頭凝腫所謂霍膝風、其劇痛、苦吟、四壁を驚かす。其痛常の者に異なり、電光の如く走りて止らず。其行く所或は上に走り、或は下に走り、人をして其走痛を按さしむること四五人、相繩ふて轉手變動して暫くも止むときなし。先づ醫四五輩手を握て予が治を待つ。故に甘草湯を處す。衆醫曰く、其湯にて驗ありや否やと云ふ。予曰、先輩は此痛み膿を爲さんとして痛なるや、何の爲めに此刺痛なるや其因を聽んと云ふに、絮談紛々として一定ならず。予曰く、此膝頭凝結の爲めに、陽氣の通勤急迫して此劇痛を發する者にして、膿汁熏釀の爲めに發する者に非ずして、氣痛なり。然らば此甘草湯にて融緩せざる者は、此人天命にして、醫の力に及ぶべからずと說きをはつて、執匕す。大劑三貼を盡して頃る治す。然りと雖も、其凝結膝頭より委中に係りて屈伸成り難し。從つて黃連阿膠湯を投ずること二十餘にして、委中の凝結融解して屈伸を得たり。依て外治家に詫して針を用ひて全癒。

一加藩の一患婦、歲三十餘、赤白帶下を病こと半年餘、諸醫瘀血と爲して之を攻め、或は調血補劑を投じて寸驗なし。予診するに其脈沈緊面色青白、所謂少陰病なり。依て桃花湯を投ずること廿餘貼にして全く癒ゆ。此れ聖醫桃花湯を擧ぐる、其條に曰く、便膿血と云ふ。大小の字を以てせず。然る所以の者は、此症本と心腸小腸に來りて膿血と成るの症なり。其小腸は二便分離の處なれば、何れに膿血の出るか知れ難きを以て、只便の一字を擧げて、大便とも小便とも決定し玉はず。此れ聖文の深長なる所也。然るを此症の膿血は大便にのみ下る者と心得たるは、其識の定らざるなり。故に方を自在にする事能はず。醫を爲す者は傷寒論の奧旨を窮めずんば有る可からず。

越後高田城下、久年黴毒を患る一婦有り、來て予に診を求む。其瘡肩より耳下に至りて腐潰し膿汁を流し、足痛し、膝頭大に凝結して屈伸すること能はず。脈緩大なり。腹症を診するに、臍上大塊有り、患婦曰く、十餘年の治療中に粉劑を服せしこと凡そ二十劑、然りと雖ども、口中腐爛等の驗なしと云々す。因て予謂ふ、玉膝は脾主の屬なり臍上も亦內位の分野たり。先づ大承氣湯を投ずること三十餘貼にして、口中悉く腐爛自ら發し、一百貼に至り、全く癒たり。故に復た以謂く、先きに粉劑を服すと雖ども腐爛無きは、臍上の塊に粉劑の附着して上行せずして腐爛なく、又寸驗なし。今大承氣湯に依て堅塊融和し、腐爛して、其毒全癒する者か。

（註、粉劑は輕粉の配劑された方劑の意。）

× × ×

× × ×

東亞醫學協會幹部
漢方各大家の合議研究製劑
である故原料の精選と處方の的確は
絕對他の追從を許さない

本劑は一時押への局處的藥劑ではなく胃腸の活力を健康と同じ樣に恢復させる特點があるあらゆる胃腸藥にも滿足しない場合にこの皇醫胃腸藥は最後的良藥としておすゝめする。

皇醫 胃腸藥

45錠 .50
105錠 1.00
375錠 3.00

株式會社
東亞醫學協會研究所製品

拓殖大學第四回漢方講座聽講生（イロハ順）

飯田　良輔氏（現住所日本橋）
井上惠三郎氏（〃　京橋）
岩田　基宜氏（〃　荒川）
石田　きく氏（〃　小石川）
石川　正二氏（〃　南多摩郡）
稲生　考三氏（〃　大森）
原　啓氏（〃　牛込）
大倉　德光氏（〃　四谷）
太田菊太郎氏（〃　芝）
渡邊　武保氏（〃　豐島）
渡部　靜氏（〃　澁谷）
河村　義元氏（〃　葛飾）
河西　みち氏（〃　中野）
鎌田　良雄氏（〃　高知）
金子　善勝氏（〃　小石川）
竹村　英一氏（〃　大阪）
高橋　信氏（〃　横濱）
武井　勇喜氏（〃　中野）
田邊　信行氏（〃　中野）
田村　耕男氏（〃　日本橋）
高柳　米壽氏（〃　神田）
瀧田　明氏（〃　茨城）
田尻　治男氏（〃　小石川）
鶴田　弘毅氏（〃　神奈川）
根岸　傳氏（〃　下谷）
中内　善馬氏（〃　豐島）
永田　義男氏（〃　小石川）
村上　顯氏（〃　品川）
宇野　誠氏（〃　杉並）
內山　貢氏（〃　品川）
野口　粂吉氏（〃　桐生）
國生　護秋氏（〃　向島）
倉谷　忠雄氏（〃　荒川）
安岡　伸泰氏（〃　向島）
山本物太郎氏（〃　本郷）
山之口助市氏（〃　目黑）
松延　虎雄氏（〃　豐島）
牧寺　節氏（〃　赤坂）
松井　清氏（〃　横濱）
松尾　文語氏（〃　中野）
姜　德順氏（〃　深川）
福岡　朝秋氏（〃　深川）
藤平　泰司氏（〃　豐島）
小高　英一氏（〃　埼玉）
洪　仁礼氏（〃　城東）
小島　修造氏（〃　神田）
糠澤子之藏氏（〃　下谷）
寺崎　歡一氏（〃　澁谷）
青木　和政氏（〃　淀橋）
赤石　義彦氏（〃　淺草）
雨宮　延幸氏（〃　江戸川）
佐藤　文藏氏（〃　葛飾）
齋藤　一曉氏（〃　芝）
崔　圭瓚氏（〃　埼玉）
齋藤　守弘氏（〃　豐島）
菊地　一雄氏（〃　目黑）
清田豐太郎氏（〃　本郷）
皆川平三郎氏（〃　淺草）
宮前　次夫氏（〃　世田谷）
白石　吉治氏（〃　杉並）
日高　健次氏（〃　大森）
守田篤太郎氏（〃　小石川）
鈴木喜代治氏（〃　世田谷）
菅根益太郎氏（〃　豐島）
菅澤　宣氏（〃　荏原）
杉野嘉治雄氏（〃　世田谷）

本協會寄附者芳名

一金拾圓也　大阪　森田之皓殿
一金拾圓也　東京　矢數　格殿

誌代拂込者芳名

一金五圓也　東京　伊藤秀三郎殿
一金二圓四十錢也　〃　中村　忠吉殿
一金一圓二十錢也　〃　岡部　祐次殿
一金一圓二十錢也　〃　友安　鎭子殿
〃　伊藤　是殿
〃　橋詰　盛義殿
〃　藤井治郎作殿
〃　淺野　秀雄殿
〃　近藤大太郎殿
〃　阿蒜　壽雄殿
〃　吉森　三樹殿
〃　中原齊一郎殿
〃　田畑　四郎殿
〃　西　綾子殿
〃　神永　藥局殿
〃　武井　勇喜殿
〃　木村　ハナ殿
〃　村上　顯殿
〃　神奈川　海老塚吉次殿
〃　工藤　訓正殿
〃　小川　春雄殿
〃　大平　諭一殿
〃　松本　義純殿
一金一圓二十錢也　千葉縣　市川　吉藏殿
〃　可世木芳藏殿
〃　栗坂原宏一殿
一金二圓四十錢也　小倉市　吉田　勝馬殿
長野市　上原　禎子殿
一金一圓二十錢也　香川縣　脇　正殿
〃　廣島　藤井　忠善殿
〃　津田　卓二殿
〃　細末　侑嗣殿
青森　藤田　昌宏殿
朝鮮　全　濟　冠殿

但し

右は五月三日迄の受付の分を發表したのであります。

昭和十五年度

拓大漢方醫學講座講義頒布

一、傷寒論、金匱要略解說（合本）　大塚敬節
二、傷寒論、金匱要略階梯（十五頁）　大塚敬節
三、漢方治療各論（一〇五頁）　木村長久
　內科一般、外科、肛門病
四、後世要方解說（三十七頁）　矢數道明
五、漢方治療各論（六十六頁）　矢數道明
　產科、婦人科、小兒科、皮膚、耳鼻、眼科
六、漢方醫學總論（八十六頁）　矢數有道
七、漢方藥物學講義（七十三頁）　清水藤太郎
八、漢方醫史學講義（八十一頁）　龍野一雄
九、鍼灸兪穴學、治療學講義（一三三頁）　柳谷素靈
十、經驗藥方分量集（十一頁）

右十冊ノ中七、十ヲ除く以外は全部增補改訂版、全揃拾二圓也にて希望者に頒布す（送料當方負擔）（但し外地は實費を要す）。

東京市牛込區新小川町二ノ七（溫知堂內）
申込所　東亞醫學協會
電話牛込（34）二七七二番
振替東京一一九、四三〇番

「編輯後記」。

今月は階行學苑創立五週年を記念して講演會を開くことになつたので、編輯は主として事務報告に終つた恰好であるが、本誌には新顏の鮎川靜、相澤四郎兩先生の玉稿を頂戴出來たこと讀者諸氏と共に喜びたい。鮎川先生は佐世保市外に御開業、長崎醫專御出身、漢方專門で仲々御多忙な處を、態々御執筆下さつた。相澤先生は廣島市雜魚場町に御開業になつて居り明治三十五年に千葉醫專を御卒業されたさうであるから、われわれの大先輩である。小出先生の私語放散は、平素の先生に似ず、仲々手きびしい。先生はオミキの加減だとの口釋であるが、これが先生の一面であらう。外柔內剛で、寒い信州に育つただけあつて毅然としたところがある。

拓大の漢方講座も四月一日から開講した。聽講生諸氏の氏名を上欄に發表してをいたが、目下續々として聽講加入者があり、記載漏れの方があらうと思ふ。それ等の方々は次號に追記したい。なほ田舍にゐて、講座に出席出來ない方々のために、教材を御頒ちすることゝした。希望の方は別項の廣告を御覽の上御申込み下さい。但し部數に制限がありますので、品切れの節は來年まで、お待ち下さい。講演會にはお忘れなくドシドシ御出席下さい。